

公益財団法人鉄道弘済会
第61回社会福祉セミナー
2025年7月6日（日） 記念講演

五十嵐 大

コードのぼくが 生きる世界





自己紹介

コードとしての幼少期から現在に至るまで

五十嵐 大（イガラシ ダイ）



• 職業：作家

社会問題や福祉にまつわるインタビュー記事、エッセイ、小説を執筆している。

- 『しくじり家族』（CCCメディアハウス、2020年）
- 『ろうの両親から生まれたぼくが聴こえる世界と聴こえない世界を行き来して考えた30のこと』（幻冬舎、2021年）
- 『エフィラは泳ぎ出せない』（東京創元社、2024年）
- 『隣の聞き取れないひと－APD/LiDをめぐる聴き取りの記録－』（翔泳社、2022年）
- 『聴こえない母に訊きにいく』（柏書房、2023年）
- 『ぼくが生きてる、ふたつの世界』（幻冬舎文庫、2024年）
- 『「コーダ」のぼくが見る世界－聴こえない親のもとに生まれて－』（紀伊國屋書店、2024年）

ぼくは、「コーダ」です



- **CODA**…**C**hildren of **D**eaf **A**dultsの頭文字を取った言葉。
- コーダの定義は「聴こえない、あるいは聴こえにくい親のもとで育った、聴こえる子ども」。
- 日本国内にはおよそ2万2,000人いると推定されている。
- 1983年のアメリカで誕生した言葉だが、日本ではあまり浸透していない。
- その他、SODAやGODAといった言葉も。

映画『ぼくが生きてる、ふたつの世界』



『ぼく』の家族構成

祖父



祖母



母



父



五十嵐家

東北の港町で
一家5人暮らし



- **父**：幼いころの病気が原因で聴力を失った、いわゆる後天性のろう者。
- **母**：生まれつき耳が聴こえない、先天性のろう者、専業主婦。
- **祖父**：元ヤクザで、腕には大きな入れ墨。
- **祖母**：障害のある家族のために宗教に入信。
- 近くに住む母の姉（伯母）が2人。

祖父母から教わる言語 – 乳幼児期 –



- ろう者の両親は声を発することもできないので、祖父母から言語を教わる。
- 祖父母の言葉は、方言が強く、年寄り言葉なので幼稚園などで笑われることもあった。
- 友だちが家に遊びに来たときに「いらっしゃい」ではなく、「よぐいらっしやった」。
- 礼儀や躄に関しても、大正生まれの祖父母によるもので、同年代の友だちが受ける躄とは若干異なるものだった。

活発だった少年がだんだん無口に ー子ども期ー

- 学芸会や遊戯会の劇では、主役を演じるほど活発な少年として育つ。
- 近所の子どもたちと一緒にいたずら三昧の毎日。
- 近所の大人たちが友だちに向かって「あの子は障害者の子どもだから遊んではいけない」と話すのを耳にする。
- だんだん、ろう者の両親を「ふつう」ではないと感じるようになり、周りと距離をとりはじめる。
- 親を守らなきゃいけないと思い始める。
- 電話通訳。親の代わりに電話に出て、親に伝えるが、電話主からは心無い言葉や大人でなければわからないような言葉が投げかけられることも多々あった。



高校では、ごくわずかの友だちだけ ―青年期―



- 友だちであっても、両親がろう者であることを伝えられずにいた。
- 私立の特別進学コースに入学するも、両親の財政を気遣い、大学入学を断念（クラスでほか1人だけが進学せず。）
- 思春期ということもあり、両親との会話（手話）が減る。
- 親を守らなきゃいけないと思う反面、なぜぼくだけが我慢を強いられるのか…という想い。
- 周りからは大人びた子どもに見えていたかもしれない。

家族との関係を探る ―成人期―

- ぼくが大学へ進学しなかったことを両親のせいにしたくはない。
- 上京後、家族（両親・祖父母）のことなど、考える暇もなく、さまざまな仕事を。
- しかし、無意識に、心の奥底には両親のことがあったのかも…。
 - 誘われるがまま入った社会人の手話サークル（NTTドコモ）へ。
 - 音が聞こえなくても、文字なら、両親に伝えられる。
 - 仕事柄、取材を通じていろいろな人のお話を伺い、多様性に触れる。
- 東日本大震災や祖父母の死、父の病気。



大好きで大嫌いだった母



- 誰よりもやさしく、愛情を注いでくれた母が大好きだった。
- 手紙の交換をしたり、拙い手話でお喋りしたり、それが楽しかった。
- 同時に、生まれつき耳が聴こえない母を疎ましく思うこともあった。
- 「聴こえるお母さんが欲しい」と言ってしまったこともあった。
- 当時、地域のろう者に対するサポートを知らなかったため、母の苦勞を目の当たりにしていた。

母との関係をやりなおす

- 仲間であるコーダたちと出会ったことで、自分は「ひとりではない」と知る。
- 彼らの一人ひとりが、懸命に親と向き合おうとしていた。
- 少しずつ母と向き合っていくように。
- そして出た結論は、母を「守る」のではなく、「ともに生きる」こと。
- 差別のあった時代に、母は惜しみない愛情を注いでくれた。それに恩返しをしたい。





コーダが抱えるものとは

- ① 親の「通訳」をする場面がある
- ② 親への「差別」「偏見」を目の当たりにする
- ③ 自分の境遇について相談しづらい
- ④ 周囲から特別視されることがある

支援がいる、いないの狭間で

- 「耳が聴こえる」という点に着目すれば、
コードは「健常者（マジョリティ）」である。
- 支援の対象とは考えられないことが多い。
- でも、コードにはコード特有の困難があり、
それを解消するため、ときには適切な支援
が必要になることも。



①親の「通訳」をする場面がある

- 日本語と手話は異なる言語のため、通訳が必要となる。
- 通訳＝ケアと捉えることで、コーダは「ヤングケアラー」とみなされることも。
- 通訳すること自体は嫌ではなかったものの…。



②親への「差別」「偏見」を目の当たりにする

- 音声を前提としたサービスを受けられない親の姿に複雑な思いを抱く。
- 過去には「優生保護法」によって強制不妊手術を受けさせられたろう者も。
- 親が傷つけられるシーンを目にすることで、コーダ自身も傷つく。



③自分の境遇について相談しづらい

- コーダ特有の複雑な心境は、他者に打ち明けにくい。
- 「わかってもらえない」と諦めてしまう
コーダも少なくない。
- 現在では、SNSや当事者団体とつながることで、コーダの孤立を防げるように。



④ 周囲から特別視されることがある

- 「頑張っているね」「立派だね」というねぎらいの言葉。
- 「可哀想」「大変だね」という哀れみの言葉。
- どちらも勝手な思い込みによるジャッジであり、コダを追い詰めてしまう。



「コードが抱えるもの」を解消するために

- 大切なのは、コード及びろう者を正しく理解してもらうこと。
 - ろう者にとっての言語は「手話」
 - 音声優位な社会のアンバランスさ
 - 情報保障がいかに重要か
 - 「マイノリティ=不幸」ではない



「知ること」「知ってもらうこと」の重要性

- 存在を知られていない＝透明人間。
- 社会はマジョリティ向けにデザインされている。
- その不均衡を正すためには、マイノリティが抱えているものを知ってもらうことが大切。



最後に…

コードとろう者について知ってもらうために、
一人ひとりの当事者が発信していくことが大切です。

その先に、どんな人も取り残されない、
誰もが生きやすい社会があります。

ご清聴ありがとうございました。

五十嵐 大



@daigarashi